

第8回(6/11)

交流するイスラーム世界 12-15世紀

カイロ 城塞と市内
2001年



事後課題 武士・騎士・マムルーク

(教室9, Plone38提出)

	語彙・出自	成立	任務	権限(リソース)	規律
武士	もののふ、さぶらひ 貴族・一般	平安時代	軍務・行政 馬上の鎧	領地(知行) →俸禄、世襲 家	儒教、武士道
騎士	Knight(servant)、家士 (下層含む)	12-13世紀	軍務・一騎 打ち・行政	領地、世襲、 家	キリストの 騎士、騎士道
マムルーク	奴隸	9-10世紀	軍務・行政	イクター、世襲不可、個人	イスラーム、 騎士道

①出自②地位継承(世襲、家)③主従関係④忠誠心⑤時代差⑥没落・現代の評価⑦コスト

* 武士やマムルークは、大名やスルタンにもなりうる(場合によっては下克上をしても)が、騎士は権力を握らない(To、Ta、Haさん) →分をまもり、(主君=貴族や国王)に仕えることが美德であり、下克上はありえない。 →不自由な社会?(西欧身分制社会) →どこでチェンジしたのか? →中国は??

* 社会・文化・自然条件の違いに還元されるか? (Ta、Miさん)

お見事！（Yoさん）

	騎士	マムルーク	武士
地域	ヨーロッパ	イスラーム	日本
時代	4世紀末～15世紀半ば	9世紀～19世紀半ば	9世紀～19世紀半ば
主従関係	封建的主従関係 ・個人間の契約関係 ・双務的契約 ・複数の主人に仕えることも可	スルタン直属の軍人 ・解放奴隷(信仰・結婚の自由) ・解放後も社会的な主従関係あり ・出世も可能 →力をつけ政権をつくるようになる	封建的主従関係 ・「家」の契約 ・片務的契約関係 ・代々「家」に仕える
土地との関係	土地を領有 ・賦役・貢納権 ・領事裁判権	イクター(徴税権) ・経済的利益のみ ・一代限り	御恩 ・本領安堵・新恩給与 ・統治権
繁栄	ノルマン・マジヤール・イスラームの侵入 →王権の弱体化・貨幣経済の衰退	カリフ直属の軍人として導入 →ウラマーの合意の重要視 →カリフの権威低下	貴族の警護 →地方で独立
没落	十字軍遠征による ・騎士の疲弊 ・教皇権の没落→王権の伸張 ・貨幣経済の普及→荘園制(領主制)の解体	近代化政策による 西洋式軍隊の導入	明治維新での四民平等 ・廃刀令 ・地租改正 ・俸禄処分

史料をもとに比較する

レオン・ゴージェの西洋の騎士の行動を支配する十戒をもとに比較する。

- 1 不動の信仰と教会への服従
- 2 教会擁護の気構え
- 3 弱者への敬意、憐れみ。彼らを擁護する気構え
- 4 愛国心
- 5 敵前からの退却の拒否
- 6 異教徒に対する休みなき慈悲泣き戦い
- 7 封主に対する厳格な服従
ただし、封主に対して負う義務が神に対する義務と争わない限り
- 8 真実と誓言に忠実であること
- 9 惜しみなく与えること
- 10 悪の力に対抗して、いついかなるときも、どんな場所でも正義を守ること

(WaShiさん)

1. 十字軍とジハード

十字軍の到来

1095年11月 教皇ウルバヌス2世がクレルモン公会議で、十字軍を宣言
「…みなさんの住む土地は十分に広いとはいえないでしょう。十分豊か
だともいえません。そのため、人々は互いに争い、互いに傷ついてい
ます。その故、あなた方の中から外へ出ていくものをとめてはいけま
せん。ふだんキリスト教徒同士の私闘を行う習慣のある者は、これを
間もなく始まる異教徒との戦いに導くのがよいのです。永らく盗賊で
あった者も、今日からキリストの兵士となるのです。親族間で戦ってい
た者は今度は蛮族と戦うことになる。低い給料で働いていた者は、こ
れから永遠の報酬を受けるのです。身体をすりへらし、魂を疲れ果て
させていた人々も、今や肉体と靈魂の栄光のために働くことになるの
です。エルサレムの「乳と蜜の流れる国」は、神がみなさんに与え給う
た土地でありあます。…もし、この遠征で、海路、陸路の途中、また
は戦闘中に落命した人々には、神が私に託された権能によって、罪の
赦しが与えられんことを、しっかりとお約束いたします。祝福をうけて
出発する者は、額か胸に主の十字の印をおつけなさい。…」

派遣の理由

- セルジューク朝のエルサレム占領、ルーム・セルジューク朝のアナトリア進出
- →ビザンティン皇帝アレクシオス一世の救援要請
- キリストの聖墳墓の解放(聖墳墓詣り)、贖宥状、ユダヤ教徒狩り
- ソドムの民—ビザンツ皇帝アレクシウス・コムネノスの遠征要請(偽書)

「あらゆる年齢と地位の男たちを、つまり、子供、若者、青年、老人、貴族、奴隷、また、さらに邪悪で醜悪なことには、牧師、修道士、そして—ああ、何たる悲しみ！—前代未聞の事実であります、司教たちまでもが、ソドムの罪によってなぶり物とし、すでに一人の司教をすらこの忌まわしい罪の下に死に至らしめたのです。」

- 1096 隠者ペトルスの先発隊がコンスタンティノープルに終結。ニカエアのクルチ・アルスランがこれを破る
- 1097 フランク軍がニカエアを陥落。
- 1098 フランク軍が、アンティオキアをエデッサを攻略し、エデッサ伯国、アンティオキア候国を樹立。
- 1099 エルサレムを攻略し、エルサレム王国を樹立。住民の大量虐殺。

エルサレム占領(1099年)

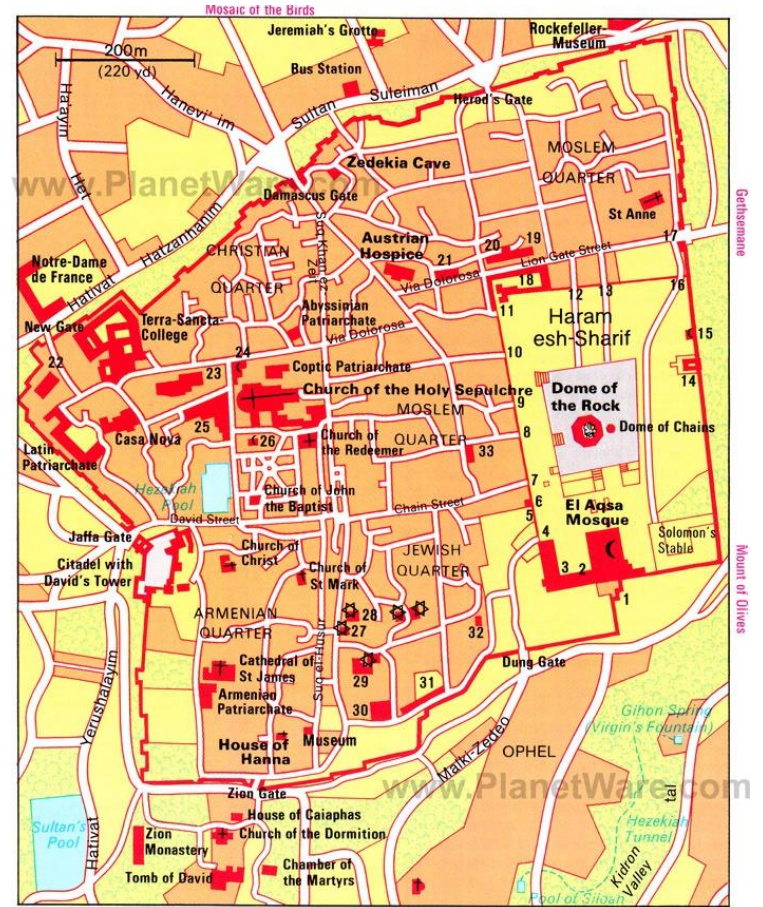
「わが軍が市壁と塔を掌握すると、すばらしい光景がみえた。同僚のある者は敵の首をはね、他の者は弓で射て塔から転落させる。また敵を炎にたたきこむ。頭や腕や脚の山が、市の通りにみえる。人や馬の死体の上を進むしかない。しかし、これらはアクサー・モスクで生じたことに比べれば、大したことではない。なにがそこでおこったか、真実をいえば、それは汝の信仰の力をこえてしまう。(いまではソロモンの神殿となった)モスクの門前では、(馬に乗って入ろうとすると)膝や手綱まで血に染まってしまう。この場所が、不信仰者によって長きにわたって不敬をうけてきたため、今、これが血でいっぱいとなるということは、神の偉大なる裁きである。市は死体や血であふれている。敵の一部はダヴィデの砦に逃れ、レイモン公に明け渡しと引き替えに安全保障をもとめてきた。」(十字軍側の史料)

エルサレム征服



エルサレム王 Godfrey of Bouillon

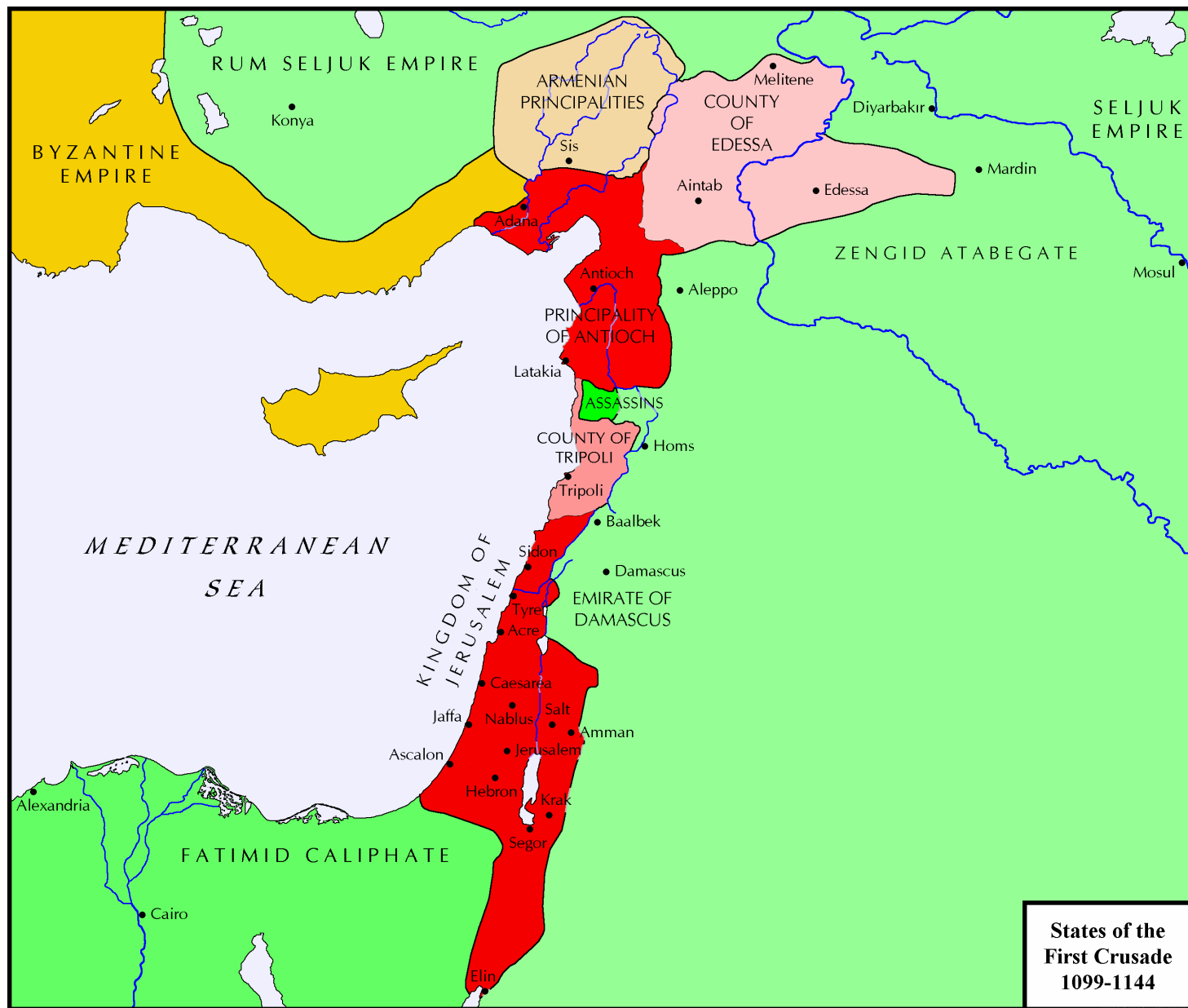
聖都 エルサレム



Altstadt

- | | | |
|--------------------------------|----------------------------------|--|
| 1 Double Gate | 12 Bab el Atim | 26 Omar Mosque |
| 2 White Mosque | 13 Bab Hitta | 27 Ramban Synagogue |
| 3 Islamic Museum | 14 Golden Gate | 28 Hurva Synagogue |
| 4 Gate of the Moroccans | 15 Throne of Solomon | 29 Synagogue Complex:
Yohanan ben
Zakkai Synagogue |
| 5 Wailing Wall | 16 Bab el Asbat | Elijah Hanavi Synagogue |
| 6 Wailing Wall – Synagogue | 17 Lion Gate (St Stephen's Gate) | Emtzai Synagogue |
| 7 Gate of the Chain | 18 El Omariye School | Istanbul Synagogue |
| 8 Gate of the Cotton Merchants | 19 Chapel of the Flagellation | 30 Metivta Yeshiva |
| 9 Iron Gate | 20 Judgement Chapel | 31 Yeshiva Hakotel |
| 10 Bab en Nadhir (Nazir) | 21 Church of the Sisters of Zion | 32 Porat Yosef Yeshiva |
| 11 Bab el Ghawanima | 22 Jesuit College | 33 Hammam el Ein |
| | 23 Greek Patriarch's Palace | |
| | 24 El Khanqa Mosque | |
| | 25 Monastery of Constantine | |

4つの十字軍国家



初期のイスラム教徒の対応

- ・諸侯の利害が対立、十字軍国家を含む合縦連衡
- ・アッバース朝カリフやセルジューク朝スルタンの関心の低さ(1099年、1111年)
- ・ バグダードにエルサレム占領の報
「(1099年8月)殺戮を逃れた人びとが裁判官のハラウィーに率いられてバグダードに到着した。彼らは御前会議の間で目に涙を浮かべ、悲惨な思いで人びとに訴えた。金曜日の礼拝では、ふたたび涙ながらに助力を求めたが、これがまた参会者の涙を誘った。伝えられるところでは、聖都でおそわれたムスリムたちのうち、男は殺され、女と子供は捕虜とされ、また財産が奪われたのである。」
「カリフ(ムスタズヒル)は、救援を求める使節団を派遣したが、彼らは目的を何ひとつ達成することなく、途中でむなしく引き上げた。ムスリムの君主たちは分裂状態にあり、それゆえフランクたちは諸国を自由に支配したのである。」(イブン・アルアシール『完史』)

- 十字軍に対する認識
- Firanj フランク人 フランク王国→フランク語 Nasrānī キリスト教徒と区別
- 戦国時代 十字軍との協定 10年単位、収穫分割、貢納金、共存、合従連衡(敵の敵は味方)

イスラム教徒の反攻

- 1146 ヌール・アッディーンがザンギー朝を継承し、キリスト教徒に対するジハード(聖戦)を呼びかける
- ジハード جِهَاد jihād (聖戦 神の道に努めること)の呼びかけ
- 1147-49 第2回十字軍
- 1169 サラディンがエジプトの支配権を握り、アイユーブ朝を樹立(—1250)
- 1182 サラディンがシリアに出兵(83年アレppo降伏、86年モースル併合)
- 1187 3月サラディンが諸侯にジハードを宣する。

サラディンによるエルサレム回復

- 7月 ヒッティーンの戦いにおいて、サラディンの率いるイスラム軍(12000騎)が十字軍を破る。「われわれは全軍をもって不信仰者たちの軍と相まみえよう。物事は人の思惑通りには運ばないものだ。われわれ人間には今後の運命を予知することはできない。この軍を解く前に、われわれは敢然としてジハードに力を傾けよう」(『完史』)
- 10月、2万騎を率いてエルサレムを包囲、守備軍(約6万)は、キリスト教徒の安全保障を条件に降伏。
「(岩のドームから金の十字架が引き下ろされると)町の内外にいた人々は、ムスリムもフランク人も同時に叫び声をあげた。ムスリムたちは喜んで「神は偉大なり」と叫び、フランク人は悲痛の呻き声をもらした。人々はその大きさと激しさのゆえに、大地を揺るがすばかりの大音声を耳にしたのであった。」(イブン・アルアスィールの年代記)
- 1188-92 第3回十字軍。92年にリチャード王は、サラディンと協定を締結し、巡礼者のエルサレム入市権をえる。
- 1202-04 第4回十字軍。十字軍がコンスタンティノープルを占領し、ラテン帝国を樹立。
- 1217-22 第5回十字軍。ハンガリー王、オーストリア王が出兵。アッカのエルサレム王ジャンなどがエジプトを攻撃。19年ダミエッタを占領。アイユーブ朝カーミルは、エルサレムの譲渡を提案する。教皇の使節はこれを拒否し、カイロへ進軍し、失敗。
- 1229 無血十字軍。カーミルは、「友人」であるドイツ皇帝兼エルサレム王フリードリヒ2世と条約を結び、エルサレム、ベツレヘムを返還。エルサレムは、共同の聖地とする。29年3月、フリードリヒがエルサレム入城。
- 1239 ダマスクスのナースィルがエルサレムを奪回。第6回十字軍
- 1248 第7回十字軍。聖王ルイ9世のエジプト出兵。アイユーブ朝サーリフが死去し、マムルーク(奴隷軍人)が防衛し、マムルーク朝を樹立(1250-1517)。
- 1291 マムルーク朝ハリールがアッカを占領(十字軍国家の消滅)。

十字軍との交流

商人の自由な往来

- 「ムスリムとキリスト教徒の両派の間には戦火が燃え上がっており、双方の軍隊は遭遇線を交えたり、戦闘隊形を保って対峙したりしているが、ムスリムやキリスト教徒の仲間たちは、何の妨害も受けずに両軍の間を往来できる。…サラディンは、[カラクの砦を]取り囲み、激しい窮境に陥れ、包囲を長く続けたのである。それでもなお、隊商は何の妨害も受けずにフランク(=ヨーロッパ)軍の土地を通して、ダマスカスからミスル(エジプト)まで連続して通過した。…同様にいかなるキリスト教徒商人も、誰一人とどめられたり、妨害されるようなことはない。キリスト教徒は彼らの土地ではムスリムに課税する。それが申し分のない安全を与えてくれる。同様にキリスト教徒の商人はムスリムの土地で彼らの商品に対して課税される。…軍人は戦いに専念するが、一般人は平穩にすごしており、戦いに勝った者が政権を握るだけのことである。」(イブン・ジュバイル『旅行記』、1184年)

文化の交流

- 技術 羅針盤、火薬、医療、築城術(クラック・ド・シュヴァリエ)
- 寛容 サラディン(ダンテ、賢者ナータン)

ウサーマ・ブヌ・ムンキズ(1095-1188)『回想録』

- フランク人の性格とその人柄／彼らにはまったく知性がない、医術の奇妙さ、裁判(決闘と神判、騎士の裁判権)

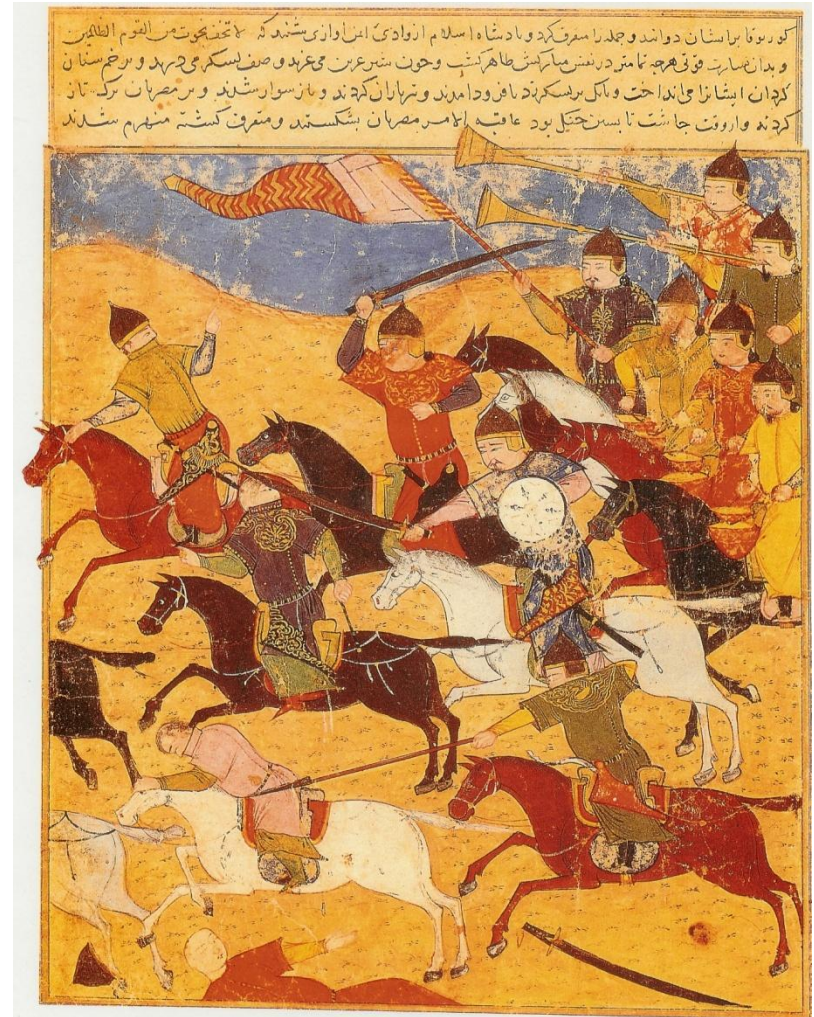
敵のイメージ

- レコンキスタ(国土回復運動)、バルカン十字軍

2. モンゴルとマムルーク朝

- モンゴル軍の襲来
イル・ハーン朝フラグ
アイン・ジャールートの
戦い
(1260年)
シリア(1300-01年)
ガーザーン ハーン位
継承で帰国

(ラシード・アッディーン『集史』、14世
紀写本挿絵)



モンゴル帝国

カルピニ(1180?-1252)、マルコ・ポーロ(1254-1324)の元朝への派遣

キプチャク・ハーン国

チャガタイ・ハーン国

イル・ハーン国

大ハーン国(元)

アイン・ジャー
ルートの戦い

マムルーク朝(1250-1517)

- 1249年6月 ルイ9世率いる十字軍 エジプト侵攻、アイユーブ朝サーリフの死去、バフリー・マムルーク軍による勝利→妃シャジャルをスルタンに擁立
- 有力マムルークがスルタンを選出
マムルークの子供は非マムルーク、世襲不可、血統よりコネ、実力(軍事、財力、政治力)により昇進
アミール 10騎長(200名) →40騎長(200名) →百騎長(24名)
マムルーク兵 スルタン2000、アミール13000、自由身分9000 計24000(ナーシル検地期)

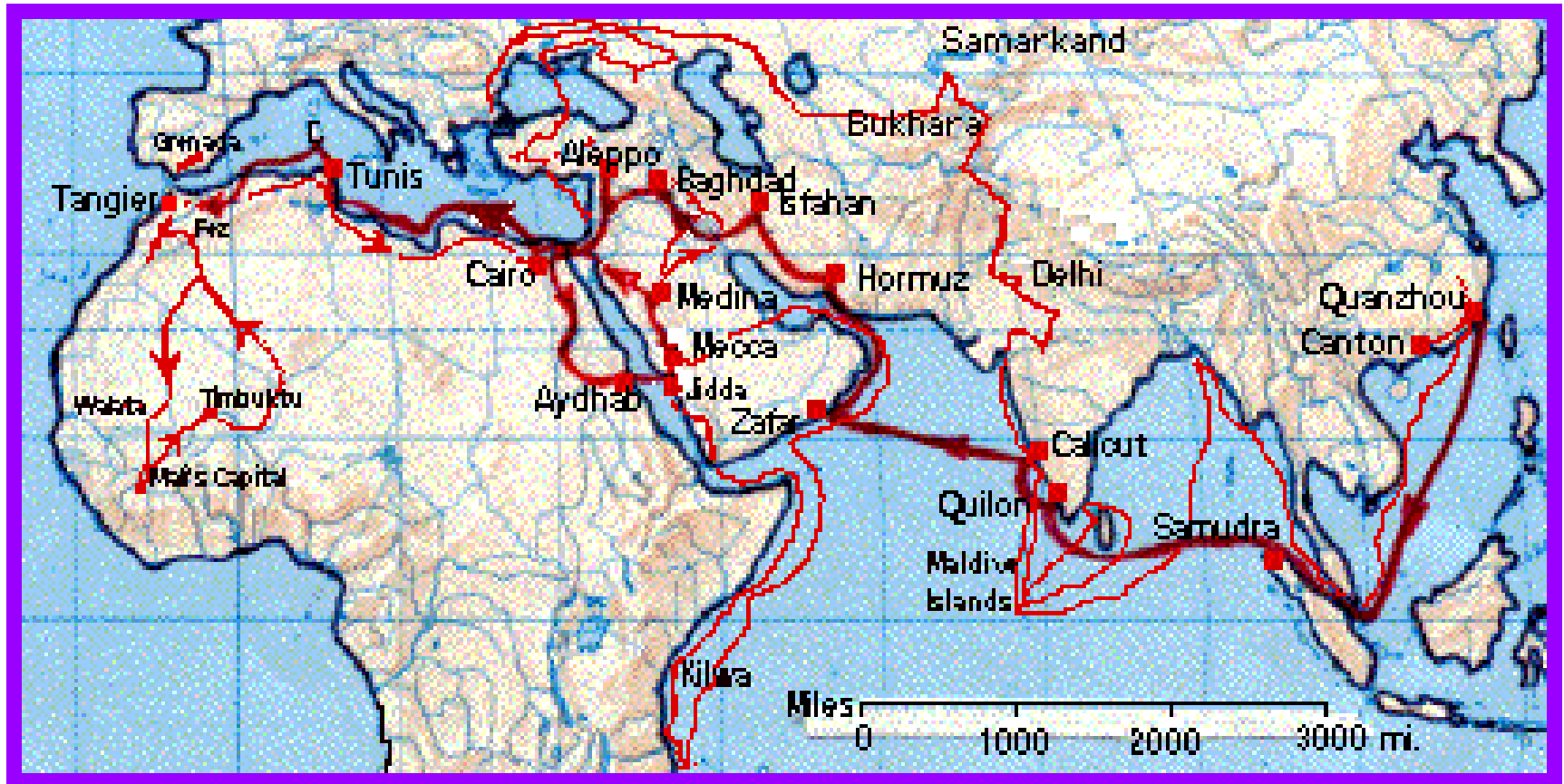
マムルーク体制の確立

- バイバルス(1260-77)の統治
 - ①アッバース朝カリフの擁立②スンナ派四法学派の公認(大カーディー制度)③バリード網
 - ④対十字軍遠征⑤アドル(公正)を実現するヒーローとして『バイバルス物語』
- ナースィル検地 1313-1325年
 - 検地(測量、税収高、土地台帳作成)にもとづくイクターの配分
 - マムルークを基盤とする支配体制
 - 錯綜した税の一元化(雑税の廃止)
 - ムクターの権利と義務(勸農＝灌漑整備、種籾)

3. イブン・バットウータの世界

- 1304 タンジール(モロッコ)に生れる
- 1325 メッカ巡礼に旅立つ
- 1326 カイロ、ダマスカスをへてメッカへ。
- 1333-40 デリー(インド)滞在、カーディー就任
- 1344-46 スマトラ、泉州、広州から大都へ
- 1346 メッカ巡礼
- 1349 フェス(モロッコ)に帰国、マリーン朝スルタンに面会。
- 1350-51 アンダルス旅行。
- 1352-54 サハラ旅行
- 1355 大旅行記の口述記録を終える
- 1356 イブン・ジュザイイによる旅行記編纂完成
- 1368/9 死去

大旅行の旅程



旅を可能にしたシステム

- ①安全保障 ②宿泊施設(学院、隊商宿) ③通信 ④イスラーム法

カイロの繁栄（イブン・バットウータ）

- ① 限りなく数多い建物、比類なきほどの豪華絢爛を誇り、往来する旅人の合同の場所。弱者と勇者の留まるところ、…すべての智者と無智な者、思慮深き者と軽薄な者、慎み深き者と愚か者、卑しき者と高貴な者、身分ある者と身分低き者、無名な者と名高き者たちの住むところ。
- ② カイロの高等学院について言えば、余りにその数が多すぎて、誰も数えることができないほどである。…病院では、数々の機器や医療品類が限りなく用意されて、毎日の収益は、1000 ディーナールに及ぶという。

ザーウィヤ（修道場）とナイル

- ③ カイロにいるアミールたちは、ザーウィヤを競って建設している。…修行者たちは、高い教養を身に付け、スーフイズムの道に精通した専門知識をもっている。
- ④ ナイルが増水を開始する時期は、6月である。その増水が16ズィラーウに達する場合には、スルタンのハラージュ税は完璧な量に達する。もし2ズィラーウが不足したならば、人々は雨乞いをしたり、大変な災害を引き起こす。



⑤ エジプトのスルタンは、カラーウーンの子、ナーシルであった。カラーウーンは、[アイユーブ朝]サーリフが1000ディーナールの金貨で購入し・・・キプチャクの出身であった。ナーシルは、寛大な性格と多くの美徳を備えていた。・・・エジプトの巡礼道とシリアの巡礼道の両道において、所持金の無い貧者たちや寄る辺のないもの人たちのために食料や飲料水を運ぶラクダを準備したり・・・。ナーシルは、毎週の月曜日と木曜日に不正ごとによる告訴を調査するためと、不満を持つ者たちの訴状を聞くための公の会議を設けるのが常であった。四大法官たちは彼の左側に座り、訴状が彼の面前で朗読されると、彼はその請願者にその問題について質問する役目の人を指名することにしていた。

キリスト教徒出身の高官

- ⑥ ナースィルの軍隊の監督官であり、彼の書記官でもある法官ファフル・アッディーンは、もとはコプト派のキリスト教徒であったが、その後改宗して実に模範的なイスラム教徒となった。…夕方になると、ナイルにそった彼の邸宅の客間に座るのが常であった。…何か頼み事があつて来る者であれば、彼はその者の話に耳を傾けて、問題を解決してやった。それが何か施しを請う者であれば、…適当と思われる額を与える。

スワヒリ(東アフリカ)

マクダシャウ

- ①スルタン=シャイフ アラビア語も知っている
- ②「何処から来た船か、その船主・船長はだれか、積荷は何か、商人たちは誰か、訊問」
- ③歓待 バターで炊いたご飯、木製の皿、クーシャーン(鶏肉、牛肉、魚と野菜)、バナナ煮、凝乳(レモン、胡椒、マンゴ添)、3回の食事
- ④宰相と法官 腰に縛る覆い布、エジプト産麻でつくった袖付き外衣、エルサレム製の筋模様の入った縁飾り付き外套、エジプト製の飾り付きターバン
- ⑤法官:シャリーアに則って処理すべき問題、宰相とアミール:それ以外の問題

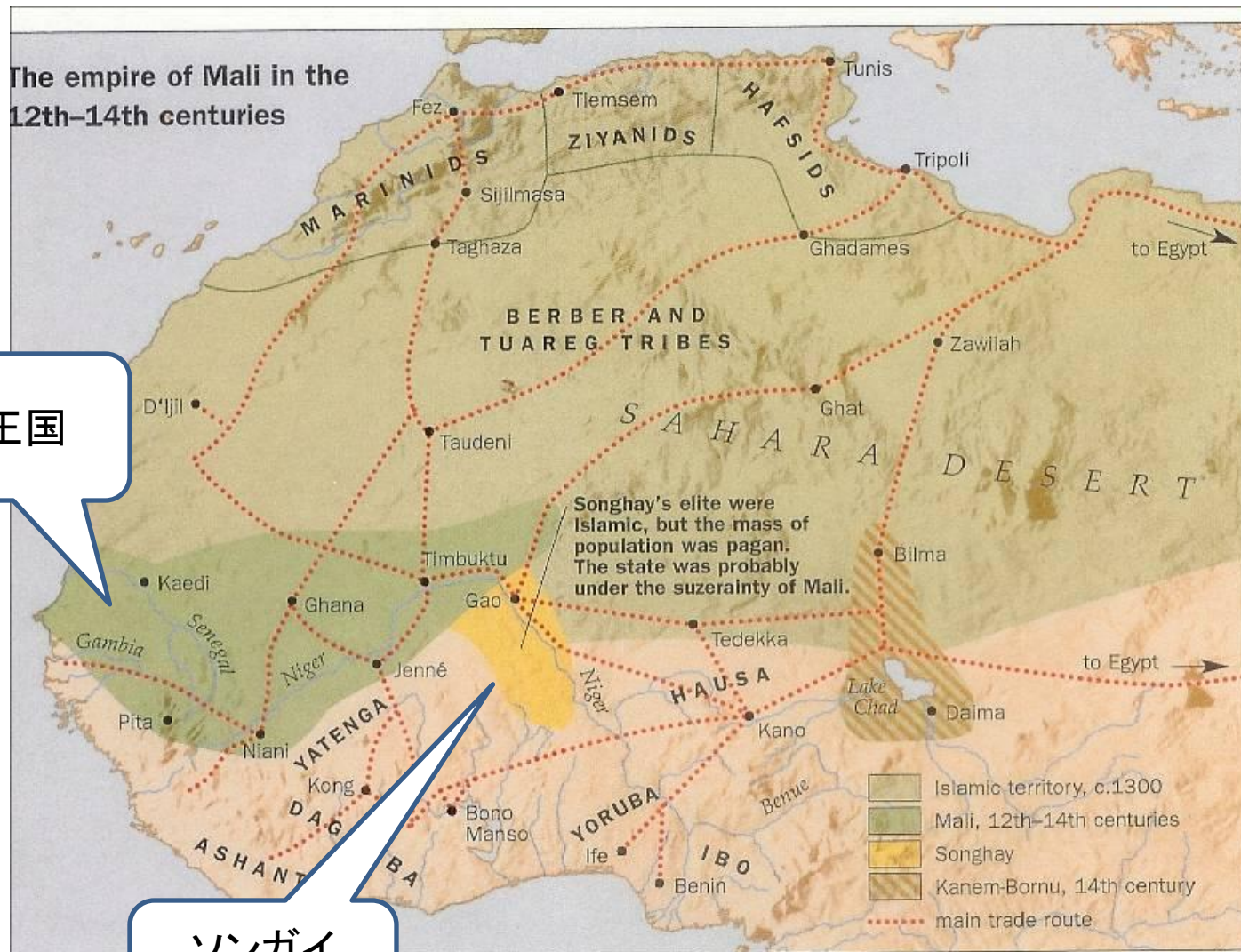
キルワ(クルワー)

「町のすべては木造であって、家々の屋根は雨が多いので、ディース葦で葺いてある。彼らは、(周圀を)ザンジュの異教徒たちと隣接する孤立の地にあるため、ジハードの民である。そして、彼らの大部分は、信仰に忠実な善行に勤しむ人たちであり、シャーフイー派法学に従っている」「スルタンは、ザンジュ人たちの土地に数多くの軍事遠征を行って征服し、戦利品を獲得すると、その内5分の1をさいて、コーランに規定されたそれに関わる分量のものを捧げ、預言者ムハンマドの血縁を受け継ぐ近縁の人たちに一定額を決め、各々別の宝物館に取り分けて蓄えて置くのが常であった。そして(メッカの)シャリーフたちは、彼を指してイラクやヒジャーズなどからやって来た」

西アフリカでの交易

ガーナ「王の町には、法廷の近くに、王宮にやってきたムスリムが礼拝を行うためのモスクがある。…王は、国にはいってくるロバー頭分の塩について金1ディーナール、また国から出ていく塩について金2ディーナールを徴収する。…王国のすべての金鉱で見つかる金塊は王のものとされており、細かい砂金だけが住民のものとされる」(バクリー『諸道諸国誌』1067年)

西アフリカ交易



マリ王国

ソンガイ
王国

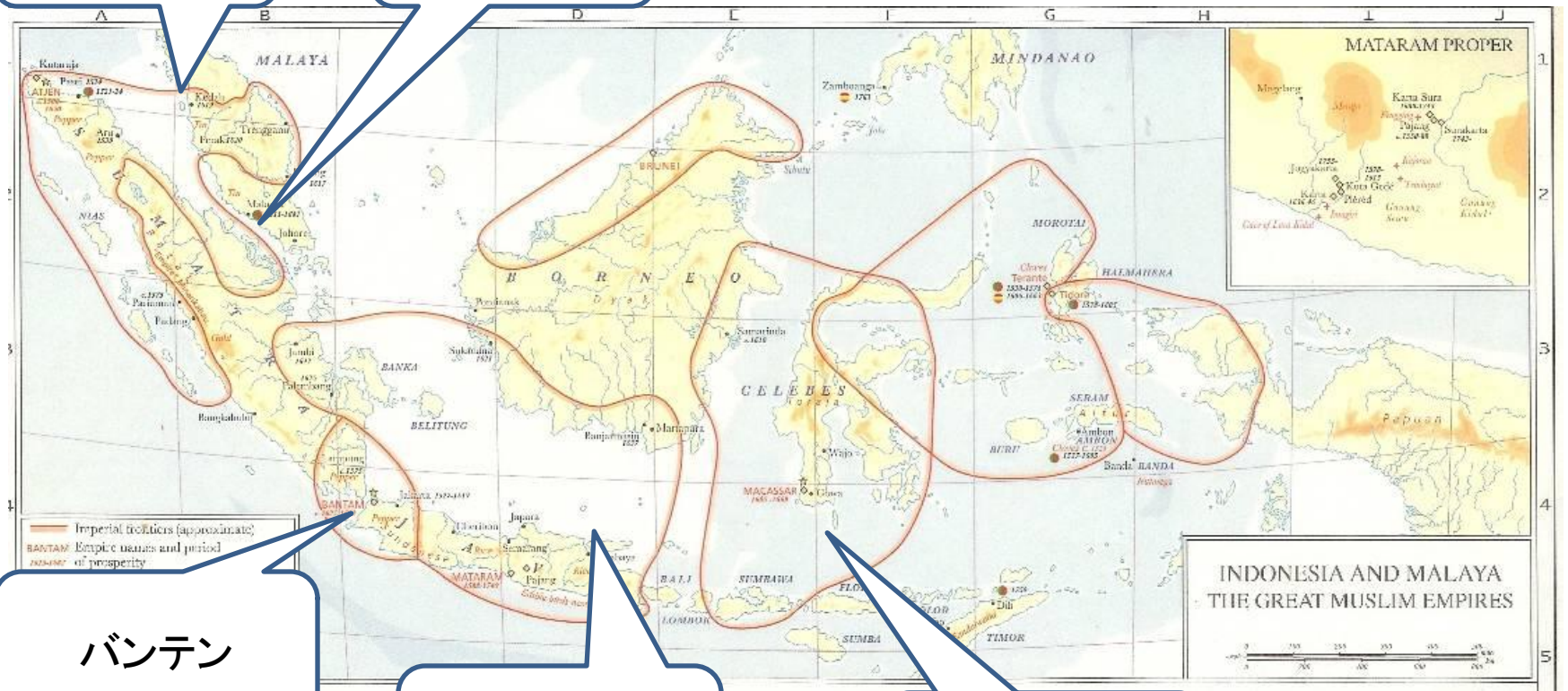
スマトラ島

- 「島の住民の売り買いは、錫片およびシナ産の溶かしていない砂金によって行われる。そもそも島にある芳香植物の多くは、島のなかでもただただ異教徒たちの地域にのみあり、イスラム教徒たちの地域にあるものは、それよりずっと少ない」
- 「我々が投錨地に着くと、早速、その住民が何艘もの小舟に乗り、ココナツ、バナナ、マンゴーと魚を持って漕ぎ寄せて来た。(来航の)商人たちに贈るのが彼らの慣行であるため、(それを受け取った商人の方も)各自応分のものを贈って、彼らに報いることになっている。海の支配者の副官もまた、われわれの船に上がって来て、われわれと同乗している商人たちを調べてから、上陸を許可した」「彼らこそは隣接する異教の人々に対する征服者であり、一方の異教徒たちは和約の条件として、人頭税を彼らに差し出している」(イブン・バットウータ『大旅行記』6:394、396)

東南アジアのイスラーム国家

アチェ

マラッカ



バンテン

マタラム

マカッサル

イブン・ハルドゥーンの生涯

Ibn Khaldun , 1332-1406, Arab historian, b. [Tunis](#). He held various offices under the rulers of Tunis and Morocco and served (1363) as ambassador of the Moorish king of [Granada](#) to Peter the Cruel of [Castile](#). In 1382 he sailed to [Cairo](#), where he spent most of the rest of his life as a teacher and lecturer. Many times grand Maliki cadi (judge) of Cairo, he made the pilgrimage to [Mecca](#) in 1387. In 1400 he accompanied the Egyptians in their campaign against Timur, and he was sent to arrange for the capitulation of [Damascus](#) to Timur. Ibn Khaldun is generally considered the greatest of the Arab historical thinkers. In his great work, the *Kitab al-Ibar* [universal history], he attempts to treat history as a science and outlines a philosophy of history, setting forth principles of sociology and political economy. He wrote an autobiography, completed in 1394, but expanded a few months before he died.



チュニジアの切手

都市の盛衰：フェス

- ①「フェスの乞食は、…肉、バター、調理した滋養品、着物、ふるいや容器のような道具など、さまざまな奢侈品や贅沢品の施しを求めている」
- ②「文明の発達した都市では、その特徴として、労働力を含めた市場価格の騰貴、物価の騰貴があり、さらには商税がこの騰貴に拍車をかける。…都会生活を営む住民の出費は増大し、その額はもはや穏当な線を越えて法外なものとなる」(以上『歴史序説』)
- ③「料理用バターについては、エジプトでは常時、不足しているため、それが豊富にあるマグリブでは絶対に考えられないことであるが、エジプト人はそれを一種の味付けに使う。…神はマグリブに肉、料理用バター、純正バター、蜂蜜やそれ以外についても豊富に授けられて、豊かなる生活を保障されてのである」(イブン・バットウータ、7:173)
- ④「女たちの嘆願は、金曜礼拝の後、読み上げられる。当の女は高貴なるスルタンの御前に進み出、御方は仲介者を介することなく直接に彼女に問いかけられる。…会議室には法学者や法官が出席するが、御方はイスラム聖法の規範に関わることで、彼らの見解に反駁される(こともある)。」(同、7:175)

カーリミー商人

- Izz al-Din Abd al-Aziz b. Mansur

父 ハマー生まれ、元ユダヤ教徒、父の代にイスラムに改宗

本人 父の死後バグダードへ。15000ディルハム以下の財産。

バスラ、ホルムズから中国へ(5回)。インド、イエメン(中国
産品について規定以上の課税)、1304/5年エジプトへ(40
万ディーナール所持)。自発的喜捨と慈善行為。

(ヌワイリー『学問の精髓』vo.32,p209)

「王侯のような力をもった商人たちもいて、彼らは、自身の護衛、代理人、協業者、奴隷、召使をもっていて、自身の邸宅の門前では、政府高官がするように、シンバルをならさせる。」

課題

- 第8回事後課題 イスラーム世界は「発展」したといえるか？（どこが発展したのか、どこが発展しなかったのか？なぜ発展したのか？） 6/15(火)締切
- 第9回予習課題「近世のイスラーム国家：オスマン朝またはサファヴィー朝と、それ以前の国家・社会との違いはなにか（軍人とウラマーについて）」 J・Kグループ担当、6/16締切。
予習教材（史料と解説）をアップ済み